祝　成人式、陶磁器婚式

山梨県建築文化賞審査委員会
審査委員長　八　木　幸　二

建築主、設計者、施工者を一緒にたたえるのがこの賞の良い点です。

建築は音楽や絵のような純粋芸術とは違いますから、貧乏をしてでも作品を作るという訳にはいきません。建築主あってのものです。設計者を意味するアーキテクトはギリシャ語の *arkhi* 主たる＋*tekton* 技術でして、日本語の大＋工とよく似ています。仕事のやり方もルネサンスの頃までは、棟梁と同じように工房が設計と施工を受け持っていました。アーキがない状態をアナーキ（無秩序）と言いますが、技術が複雑になるに従って、秩序を創る専門家が必要になり設計者という職能が分離したのです。

この三者の良好な関係によって”良い建築”がつくり出されるわけですが、さまざまな要素を考慮した結果としての建築物ですので、審査基準が単眼的にならないように、視点の異なった審査員団による合議制で選んでいます。第一回で公衆便所が受賞しているのが良い例ですが、規模や予算の大小が質を決めるものではありません。近年では、建築の持続性（サステナビリティー）が社会全体の持続性にとって大切であることを意識して、保存、修復、増築、減築なども授賞対象となり、第 20 回の山梨市役所はその良い例です。スクラップ・アンド・ビルドではなく、何を使い続けるかをきちっと判断することが大切になってきています。

建築文化賞が成人式、陶磁器婚式を迎えた今、建築文化賞の中に“持続性”部門を設けて、20 年前の受賞者の中から、良く使い続けられている建物を選んだらどうでしょう。受賞者はその建物を維持管理している使用者です。石の建築を背景とするヨーロッパと違い、日本は伊勢神宮の式年遷宮のように建て替え続けることによって伝統を守るのだという説がありますが、民家のように石の建築に負けないような“持続性”を誇ってきた伝統もあります。この賞が、やがて銀婚賞、金婚賞、ダイヤモンド婚賞となっていくことを願っています。

平成２２年３月